

東北大学出版会 報

第34号

宙

おおぞら

〒980-8577
仙台市青葉区片平2-1-1
TEL 022-214-2777
FAX 022-214-2778
<https://www.tups.jp>
E-mail:info@tups.jp

2021年11月

自著を語る



α星

『分子疫学入門 〜精密医療の基礎知識〜』

栗山進一

自閉症という疾患がある。レオ・カナー博士が一九四三年に11人の子ども達を「早期幼児自閉症」として報告し、世界で初めてその概念を提唱した。

自閉症はその特異な症状や概念の複雑さから奇異な歴史を辿ってきた疾患である。当初は、両親の性格や養育態度が原因の心因性反応ではないかといわれた。母親の冷淡な養育態度が子ども発育に影響しているとする説で、母親は「冷蔵庫マザー」とよばれ非難を受け続けた。

こうした考えは二〇年以上もの長きにわたって信じられ、母親は自責の念や罪悪感に苛まれた。医療関係者が自閉症をもつ子どもを母を集めて開いた講演会では、その医療関係者が冷蔵庫マザーの概念をとうとうと述べ、並み居る母親を罵倒し続けた。その間母親は苦悶の表情を浮かべながらその医療関係者をにらみつけ続け、会場全体が異様な雰囲気包まれていたとの記録がある。一九六〇年代の後半ころからようやく、自閉症の原因として生物学的な要因の関与が大きいのではないかとされ始め、現在の医療や教育の関係者で冷蔵庫マザーの考えを全面的に支持する者はほとんどいなくなった。それでもなお冷蔵庫マザーの考えの影響は残っているし、自閉症と診断されている人本人が自分の生きづらさのために苦悩を続けている。また、両親や兄弟、祖父母に至

るまでその苦しみは広がりをもせている。最近の報告では、自閉症の人は約百人に一人いるとされている。

一九七〇年代にはカナリーが定義した患者以外にも、近縁の症状を呈し、重症度が様々のサブタイプが存在することが認知され始めた。現在では、自閉症、広汎性発達障害、アスペルガー症候群などのいろいろな名称で呼ばれていたものは、二〇一三年のアメリカ精神医学会の診断基準 DSM-5 の発表以降、自閉スペクトラム症 (ASD; Autism Spectrum Disorder) としてまとめて表現されるようになった。本稿ではこの ASD を自閉症と称している。

このように疾患概念は変遷を遂げながら医学的な理解は進んできているものの、原因が解明され治療法も確立し人々は救われたのかという残念ながらそうではない。自閉症の原因は多くの遺伝的な要因が複雑に関与して起こる脳の機能障害が原因と考えられているが決定打はみつかっていない。残念ながら自閉症の客観的な診断基準は存在せず、医師によって診断が異なる可能性がある、単一の疾患を同定できている保証もない。

自閉症の主な症状は、対人関係が苦手であるということと強いこだわりがあるということの二つであり、DSM-5 では診断基準として、① 複数の状況で社会的コ

ミュニケーションおよび対人相互反応における持続的な欠陥、② 行動、興味、または活動の限定された反復的な様式を採用している。自閉症はこの他にも音に対する過敏、触覚過敏、言語の表出障害、統合運動障害、頭囲拡大、筋緊張低下、無気力、不眠、痙攣など多彩な症状を示す場合があり、自閉症の複雑さを示唆している。

「分子疫学」は自閉症のような多因子疾患の原因解明と治療法開発を旨とした研究分野である。疾患が起こる原因として遺伝要因と環境要因を考慮することに加え、疾患をどのようにとらえるかが重要な要素であると分子疫学では考えている。これまで、自閉症という疾患名でまとめられ潜在的に異質な集団を一塊として扱った患者群全員と対照群との遺伝子研究では遺伝的感受性因子を特定したとはいえない状況であった。最新の分子疫学研究では、人工知能解析技術である深層学習などを用い、自閉症を新規でより遺伝的に均質な集団、クラスターに分けることで、影響が大きく統計学的に有意な遺伝的要因を検出している。こうした研究は、自閉症の遺伝的構造と病因を解明し、同症の個別化医療・精密医療の開発を促進する手がかりを提供するものである。

拙著『分子疫学入門』は同学問分野の基礎を習得する

ために書かれた。

(くりやま しんいち・東北大学災害科学国際研究所
教授、災害公衆衛生学・分子疫学)

分子疫学入門

精密医療の基礎知識

栗山進一 著



「分子疫学的素養」を身につけ、精密医療研究とその社会実装を推進する、次世代医療の理解と実践のための書。

A5判・二四頁・三〇〇円(税込)

がん検診判断学

久道 茂 著



がん検診について精緻な科学的検証を行いながら、医学判断学の考え方をがん検診に特化して比較検討し、新たな「がん検診学」を提唱。がん対策必携の書。

A5判・三三八頁・三〇〇円(税込)



β星

いま、そこにある危機―喪
われる「歴史」を守る―

川内 淳 史

しばしば「日本は歴史が豊かな国である」と言われる。「歴史が豊か」とは一体どういう事であろうか。おおよそ人の生活が営まれる社会においては、その集団の来歴を示す「歴史」が蓄積されるものであり、そう考えると、何も日本だけが「歴史が豊か」な国・社会であると言うことはできない。しかしながら、こと「歴史」の蓄積を示す歴史資料―「古文書」とも呼ばれる―が豊富に、しかも私たちの身近な所に残されているという点においては、日本は世界的に見ても稀有な社会であると言うことができよう。

歴史資料の伝来という点からの日本社会の特質として、江戸時代以来の社会の編成原理として据えられている「家」と「村」が歴史資料を保持し、後世へ伝える主体として機能していたことが挙げられる。この点、伝統的に公的文书を保存するための施設(公文書館)が発展したヨーロッパとは異なり、いわば地域社会そのものが

「アーカイブズ」として機能していたと言えよう。日本の地域社会に伝えられた歴史資料は、神戸大学の奥村弘氏の概算によれば、少なくとも約二〇億点にのぼるとされている。これを単純に計算すると、ひとつの都道府県には約四二〇万点の歴史資料が存在するということになるか。しかしながら現在、私たちが認識できている歴史資料は、このうちのごく僅かではない。大部分の歴史資料は人知れず蔵や押し入れの中で眠り続けているか、もしくはすでに喪われてしまったものもあるだろう。

このように膨大に残された日本の歴史資料が、今、喪失の危機に瀕している。その主な要因は、高度経済成長期以降の日本社会の変化である。人口の都市集中が進む一方での農山漁村の過疎化、少子化・超高齢社会による人口減少、また産業構造の変化等による「離村」、そして自治体の大規模合併による地域社会の縮小・空洞化などが進んだ結果、地域社会は歴史資料伝承の主体としての力量を弱め、結果として数百年來保持し続けてきた大量の歴史資料が喪われつつあるのである。さらに地震や津波、洪水など、近年頻発する大規模自然災害は、この事態を加速させる契機となる。

日本において大規模自然災害から歴史資料の喪失を防

ぐ取り組みが本格的に開始されたのは、一九九五年の阪神・淡路大震災からである。阪神・淡路大震災で被災した歴史資料を救出し、保全することを目的に「歴史資料ネットワーク」という団体が、関西圏の歴史研究者や行政職員、市民を中心に結成された。その後、同様の団体が全国で多数設立され、現在では三〇を超える団体が存在している。これら各地の団体による「資料ネット運動」と呼ばれる活動が、現在、日本国内の歴史資料を救済・保全する活動の中核を担っている。宮城県でも、二〇〇三年の北部連続地震を契機に「宮城歴史資料保全ネットワーク」が設立され、本学災害科学国際研究所内に事務局が置かれている（設立時は東北アジア研究センター内）。筆者は二〇〇七年よりこの活動に参加し、歴史資料保全の実践に携わるとともに、歴史資料を残し、伝えるための方法論について研究を進めている。

一〇年前の東日本大震災、宮城県では約一〇万点の歴史資料が救出された。しかしながら、あの震災で実際にどれだけの歴史資料が喪われたか、今となっては正確に知ることはできない。

地域社会に残された歴史資料に記される出来事は、歴史の教科書には載らない「小さな事柄」であることが多

い。しかしながら、その「小さな事柄」ひとつひとつは、この列島上で生きた人々の「生」の証である。喪われようとする歴史資料をひとつでも多く守り伝え、それらを読み解いて人々の「生」の証を回復すること。歴史を紡ぎ、豊かにしていくのは、その地道な蓄積の上にか成り立たないのではなからうか。

(かわうち あつし・東北大学災害科学国際研究所准教授、歴史学)

東日本大震災からのスタート

災害を考える51のアプローチ

東北大学災害科学国際研究所編



東日本大震災から一〇年の経過を契機とし、最新の知見と研究成果から得られる「災害」への取り組みを多角的に論じる。

B5判・二三四頁・三三〇〇円(税込)



γ星

津波と地質学

菅原 大助

筆者は、地質学とその他の分野の手法を用いた津波の研究に携わっている。地質学は地層や化石、岩石を使って過去の環境やその成り立ちを解き明かす。地層や化石から分かる過去の地球や日本列島の姿に、一度は興味をもったことのある人は多いのではないだろうか？ この仙台でも、何百万年もの昔は海底であったことを示す地層が各所に見られる。

津波は、気象現象以外を原因とする波長の大きい波である。どんな巨大津波でも現象の時間尺度は数十分〜数日であり、数千年・数百万年単位で物事を見る地質学とは一見関係が無さそうに思える。津波が地質学の研究対象となるのは、津波が土砂を動かして地層（津波堆積物）を造るからである。世界初の津波堆積物の学術的な調査研究は、一九六〇年のチリ地震の際、我が東北大学の理学部地質学古生物学教室の調査団により行われ、特徴が詳しく記載された。条件さえ良ければ、津波堆積物は何

百年・何千年と海岸域の地層中に残され、往時の出来事
の一端を我々に垣間見せてくれる。それは、将来の津波
災害の可能性を推し量るための貴重な情報源でもある。

東北大学は、津波堆積物に基づく古い時代の津波の研究
でも最初期からの研究機関の一つであり、地質学古生
物学教室名誉教授の箕浦幸治先生が先駆者として世界に
知られている。二〇一一年の震災後初めて、貞観地震の
名をご存じになった方も多いと思う。西暦八六九年の貞
観地震は、たった一つの古文書記録により知られていた
平安時代の出来事で、その津波堆積物は一九八〇年代後
半、箕浦先生によって仙台市内で初めて発見された。筆
者は、箕浦先生のご指導の下、一九九〇年代末から修士
論文の課題としてこの津波堆積物の調査研究を始めた。
初めのうちは一人掘削機材を背負い自動二輪車で大学と
現場を往復していたものである。博士課程とその後
に至っても、研究室の先輩・後輩に協力を仰ぎながら、仙
台の荒浜周辺で何度も掘削を繰り返したことが懐かしく
思い出される。なお、貞観地震などの研究については、『今
を生きる 5 自然と科学』（吉野・日野編、東北大学
出版会、二〇一三年）に詳述がある。

津波堆積物の研究は、他分野との連携によって大きく

発展してきた。特に、海岸工学による津波氾濫・土砂移
動の数値解析の手法は、調査地の選定、津波堆積物形成
過程の分析、津波発生源の推定など、研究に欠かすこと
のできない強力な手段となっている。また、古生物学・
地球化学・地理学などの地質学の隣接分野のみならず、
考古学・歴史学・人類学など異分野の手法と知見を取り
入れた多角的な分析も、地層中の津波堆積物を認定し、
その年代を決定する上で重要である。筆者も、卒業論文
の頃から津波数値解析の技法を学び、津波堆積物の研究
に大いに活用してきた。このように様々な分野と協力し
て研究を進めるところは、津波堆積物研究の面白い点の
一つである。二〇〇〇年代前半まで津波堆積物に取り組
む研究者の数は限られていたが、二〇〇四年のインド洋
大津波、二〇一一年の震災などいくつもの津波災害を経
て津波堆積物の重要性に気が付く人々が増えるとともに、
他分野からの参入もあり、津波堆積物研究は新しい
学際的分野として確立してきた。

地中に埋まっている津波堆積物の試料を得るのは容易
ではない。調査は通常、水田や沿岸湖沼など地層保存の
条件の良いところを選んで行うが、用地使用の許可を得
るのは一苦労である。地下の地層は掘り返すまでそれが

どうなっているかは分からず、良い試料を得られなかった場合には何度も掘削を繰り返さなければならぬ。しかし、苦勞の末に得た試料の中に新発見の兆候があったときの興奮は、何とも言いようがないものがある。それは、新種の化石や遺物を発掘したときに感じるものに通じるかもしれない。防災への実用上の貢献に加え、未知の物事・新発見への好奇心も、この種の研究を進める上で大切な動機なのであろう。

(すがわら だいすけ・東北大学災害科学国際研究所
准教授、地質学、平成一八年東北大学大学院理学研究
科博士課程修了)

今を生きる

東日本大震災から明日へ！
復興と再生への提言



- 1 人間として 座小田豊・尾崎彰宏 編
- 2 教育と文化 水原克敏・関内隆 編
- 3 法と経済 稲葉馨・高田敏文 編
- 4 医療と福祉 久道茂・鴨池治 編
- 5 自然と科学 吉野博・日野正輝 編

A5判・各巻二〇〇円(税込)



δ 星

私の本棚

柳美里さんの夏

佐藤 弘 夫

研究者の例に漏れず、わたしの本棚もたくさん書籍に埋もれている。今回「私の本棚」というテーマを頂戴して、自分がどんな本を持っているか、改めて振り返ってみたが、同じ著者で一番たくさんあるものは、研究者ではなく作家の柳美里さんの本だった。

柳美里さんとの出会いは、二〇一六年六月にいわき市で行われた、東日本国際大学二〇周年記念式典で、基調講演をご一緒したときだった。

このとき柳さんはご家族とともに、二〇一一年の大震災と福島第一原子力発電所の事故で大きな被害を受けた南相馬市の小高に移住し、地元の人々に交じって復興に協力しておられた。「福島に寄り添う私」という演題のお話は、被災地の状況を、現地の人と同じ目線で目の当たりにしてきた柳さんならではの、深く心に染み入る内容だった。

わたしのテーマは「神・人・死者―日本列島における

多文化共生の系譜」だったが、その内容に柳さんも関心をもっていたのだようだった。そうしたことあつて、懇親会の席上では話が進んで、一緒に東北を歩いて本を作ろうということで意気投合し、まずはお互いに自著を送ることを約束した。

数日後、自宅に柳美里さんから大きな荷物が届いた。自身はたくさんの著書で、どの本にも毛筆による達筆な署名と押印があり、一言書き添えがなされていた。ボールペンで雑なサインしただけの本を送ってしまったわたしは、とてつもなく気恥ずかしい思いにとらわれたことを憶えている。

その年の夏から半年にわたって東北の霊場や被災地を歩いた記録は、宍戸清孝氏の素晴らしい写真に対談やエッセイを加えて、『春の消息』（第三文明社）として翌年刊行された。専門家のわたしが柳さんをご案内するという形をとってはいるが、柳さんとの対話のなかで、一人では見つけ出すことのできないさまざまな視点に気づかされ、ハッとしたこと一度や二度ではなかった。真夏の会津で食べたかき氷の美味しさは、いまでも舌に残っている。

いまやわたしもりっぱな高齢者になってしまった。自

分の人生を振り返ってみて、一番の幸福は、たくさんの人々との巡り合いだった。偶然の出会いをきっかけにして、さまざまな分野で活躍する方々から、教え切れないほどの本を頂戴した。本棚にある本の一冊一冊を手にするたびに、それが記憶を起動するスイッチとなつて、著者との思い出が蘇る。

作家といえ、内館牧子さんとは、長きにわたつて、新刊書が出れば贈り贈られる仲である。今年刊行された内館さんの『小さな神たちの祭り』（潮出版社）と、わたしの『死者はどこに行けばいいのか』（興山社）は、世界観がよく似ているということで、メールのやり取りのなかで盛り上がった。

本棚には多和田葉子さんの本も多い。多和田さんとは二〇一七年の都留国際文学祭で講演をご一緒したことがきっかけになって、遠野をご案内する計画を立てていたが、パンデミックのために延び延びになってしまっている。

『春の消息』は、「夏」「秋」「冬」というシリーズを出すことを前提としたネーミングだった。柳さんとは、今度紀伊半島を歩いてみたいね、といった話はしているが、本の売れ行きがいまひとつということもあるせいか、

出版社が続編の刊行になかなか首を縦に振ってくれない。

柳さんは昨年『J・R上野駅公園口』（河出書房新社）が全米図書賞（翻訳文学部門）を受賞したことで、いまはとんでもない忙しさに巻き込まれてしまっている。わたしの手元にあるこの本の内表紙には、「時は過ぎないことは終わらない」という柳さんの言葉が記されている。受賞が決まって、「おめでとう」「ありがとう」というメール交換の後はなかなか会うことも叶わないが、海の彼方にあるという補陀落浄土を望む熊野の海岸で、いつか柳さんと語り合える日が来ることを楽しみにしている。

（とと） ひろお・東北大学教授、日本学、昭和五三年東北大学大学院文学研究科博士前期課程修了）

（人文社会科学講演シリーズ10）

ハイブリッドな文化

東北大学大学院文学研究科 講演・出版企画委員会編
四六判・二〇〇頁・二四二〇円（税込）

帰郷―「若手研究者出版助成」から

星

「時代の流れ」

井本佳宏

比較的高齢に至るまで若手と呼ばれる研究業界とはいえ、四〇を超えて頭に白いものが混じるようになって、さすがに年齢を意識する機会も増えてきた。とりわけあらゆる業務がオンラインとなったコロナ禍にあつては、変化のスピードについていくのがとてもつらい。対面のつながりの大切さを思い、コロナ禍以前の大学を懐かしみつつも、これも時代の流れと観念して新しい技術の習得に勤しむ毎日である。

ところで「時代の流れ」って何？ みんなついていくのがつらいのに、なぜそんなものについていくの？

実は研究を始めてこの方、ずっと考えてきたのがこのことだ。時は二十数年前、まだ私が紅顔の美少年？だった学生時代までさかのぼる。

関西の田舎町で生まれ育ち、都市と田舎の格差に鬱屈した感情を抱いていた私は、学校制度をめぐる地域間の不平等に関心を持ち、教育学を学ぼうと仙台へとやって

きた。当時、宮城県では公立高校の男女共学化が進められていた。戦後教育改革が比較的忠実に実施されていた京都府出身の私にはそのこと自体驚きであったが、まだ宮城県ではいわゆる伝統校と言われる公立高校の多くが男女別学のまま残っていたのである。

共学化への賛否について、地元メディアを通じて盛んに報道されていたが、そこでは多くの人々が、「共学化は時代の流れだから仕方がない」という論調で語っていた。こうした語りの中には、感情としては別学のままがいいけれど、理性に照らして共学化に賛成するという判断があらわれている。

確かに私たちは、「時代の流れ」といった言葉をしばしば使うことがある。しかし諸個人の思いとは別個に存在する「時代の流れ」とはいったい何なのだろうか。漠然としていた学校制度をめぐる関心は、諸個人の意思を超えて学校制度の生成・変容をもたらす「時代の流れ」のダイナミズムへの関心として像を結んでいった。その後、卒論、修論を経て、最終的に博士論文に至るまで、「時代の流れ」は私の研究の書かれざるモチーフであり続けた。

博士論文では、日本における単線型学校体系の成立過

程について研究した。この論文では、コミュニケーションのネットワークとして社会を捉えるドイツの社会学者ニクラス・ルーマンの社会システム理論に依拠して、諸個人の意思から独立した教育システム固有のダイナミクスとの関わりから、教育制度の変革プロセスの説明を試みている。

「ところで、『時代の流れ』の正体は捉えられたのかい？」

そう思われた方はぜひ論文をご一読いただきたい。拙い論文ではあつたが、幸い東北大学出版会より若手研究者出版助成に採択していただき、単著として刊行することができたので、手に取っていただくことが可能となっている。

「コミュニケーションを社会システムの要素とする理論枠組みに即して教育制度史を編み直すことで、教育制度学はコミュニケーション論を媒介として人間形成論や教育組織論との接続の糸口を見出すことができる」。「また、このことは、学問的なまとまりを欠きがちな教育学のアイデンティティーを再構築することにも繋がる」。終章では教育学そのものの再構築という大それたことを書いてしまった。恥ずかしげもなくこんなことをよく書

けたな、とあきれると同時に、これを書けた当時の自分の若さを今となつては羨ましくも思う。実際、自らの若気の至りにその後の私は助けられた。刊行後、本書を読んでいただいた先生から、教育学のテキストの分担執筆に声を掛けていただくなど、その後の研究生生活の展開につながったのである。

その後、「時代の流れ」か私自身の研究テーマも移り変わっていったが、それでも本書のモチーフは、今に続く研究者としての私の歩みの原点であり続けている。

(いもと よしひろ・東北大学准教授、比較教育学及び教育制度論、平成一九年東北大学大学院教育学研究科博士課程修了)

日本における 単線型学校体系の 形成過程



— ルーマン社会学システム理論による分析 —

井本佳宏 著

A5判・八二頁・三三〇〇円

書評

東北大学学際科学フロンティア研究所『百科
科覧』編集委員会編、東北大学出版会
二〇一九年一月刊行



と星

『百科科覧』若手研究者が
挑む学際フロンティア
Vol.1』

伊藤 房雄

本書は、東北大学学際科学フロンティア研究所の若手研究者たちが企画、執筆した啓蒙的な一般書である。次代を担う若き大学生を主たる読者層と想定し、執筆者自らが取り組む具体的な研究事例を素材に、学際研究あるいは融合研究の醍醐味や有用性、必要性をわかりやすく解説している。タイトルの『百科科覧』はいろいろな花が咲き乱れている「百花繚乱」の借用であるが、そこにはさまざまな方向に発展しているたくさんの学問分野を一覧する意味が込められている。本書では、天文学、行動経済学、数学、植物栄養学、情報科学を基軸とする学際研究の実際と、URA (University Research Administration) からみた融合研究の環境づくりが紹介されている。

さて、本書のキーワードである学際研究の「学際」という言葉であるが、祖父江(1995)によると、その出自は一九五〇年代の米国で用いられた「Interdisciplinary」の訳語「学際的」に求められ、個々の確立した学問「Discipline」の間「Inter」にある領域、ないしは複数の学問が相互に関係する領域という意味で、日本では一九七三年版の『現代用語の基礎知識』に初めて登場したという。社会的にはすでに半世紀ほど使われてきた言葉であるが、今日なお「学際」という冠があちこちの新たな研究組織の名称に用いられる背景には、学際とは裏腹に、既存の学問領域の城壁が時間の経過とともにますます高く厚く、そして強固になっている現実がある。

人文・社会科学の研究者には奇異な光景に映るかもしれないが、自然科学の研究室のなかには同じ研究領域でありながら別々のテーマに取り組むチームが複数あり、そこでは互いにどのような研究に取り組んでいるのか情報共有ができていない研究室も少なくない。そしてここでは、日進月歩する情報処理や分析装置のイノベーションに支えられて、世界最先端の研究成果をいち早く公表したいという研究者のピュアな想いがピンポイント的な研究領域の深掘りを加速させているように思われる。さ

らにそこに近年アカデミア全体を支配しつつある業績至上主義が加わることによって、NatureやScienceといったImpact Factorの高い著名な学術雑誌に一本でも多く論文を掲載したい、そして大型の外部資金を獲得して研究環境を整備拡充していきたい、等々といった研究者の省みることのない欲望が刺激され、研究のタコツボ化はいよいよ堅牢なものになっているように思われる。

しかしここで、少年時代にひらひらと庭に飛んできた一羽の黄色い蝶に魅了され、生命とは何かを探索し続けるポール・ナース(二〇〇一年ノーベル生理学・医学賞受賞)を引き合いに出すまでもなく、われわれが研究を続けているのは、決して従来の学問の踏襲やタコツボ化を助長するためではなく、知的好奇心に基づく真理の探求や人類の幸福の増大につながる社会課題の解決策を見出すためではなかったであろうか。この点に立ち返って改めて考えてみると、学際研究や異分野融合研究の有用性や必要性はもはや自明のことであろう。

折しも東北大学では、国際共同大学院プログラムをはじめ、部局の学問領域の壁と国境の壁を越えた学際的なグローバル人材の育成に取り組んでおり、分野融合研究に興味関心を持つ学部生の増大に期待が寄せられてい

る。本書がその一助となることを確信し、高校生を含めて多くの若者が手にすることを願っている。

なお、本書の続編として、生物学、海洋学、素粒子物理学、化学、考古学、ナノバイオ工学を専門とする若手研究者らによる『百科繚覧』若手研究者が挑む学際フロンティア Vol. 2』も刊行されている。併せて一読をお薦めしたい。

〈参考文献〉

祖父江孝男（一九九五）「学際的学問の成立」『日本不動産学会誌』第10巻第3号、pp. 41-46.

ポール・ナース（二〇二二）竹内薫訳『生命とは何か』ダイヤモンド社。

（いとう）ふさお・東北大学教授、農業経済学、平成元年北海道大学大学院農学研究科博士課程単位取得退学）

百科繚覧

若手研究者が挑む学際フロンティア Vol.1

東北大学学際科学フロンティア研究所『百科繚覧』編集委員会編

A5判・三三〇〇円（税込）

出版会たより 34

7 星

時代の変遷と電子出版

谷 内 一 彦

東北大学に一九七五年に入學して今まで、留學の時期を除いて殆ど東北大学の中で過ごしてきた。入學以降は高額な医学書を購入して、勉強に専念すると同時に持て余した時間で小説を書店で購入して読み漁っていた。多くの小説を読んできたが、中国の歴史小説を読むことで余暇を過ごすことが多い。高校生の時に読んだ吉川英治の『三国志』に始まり、最近では宮城谷昌光の歴史小説を読んでいる。そのようなこともあり、一九九〇年代の初めから中国人留學生を指導して、教室に受け入れられた。かなり読んでいたので、私のところに来る中国人留學生より中国史に詳しいと自負している。私の好きな時代は春秋戦国時代で、紀元前七七〇年の東周から紀元前二二一年に秦の始皇帝が中国を統一するまでの時代である。この時代には面白い人物がたくさん出てくる。儒教や老莊思想など日本に大きな影響を与えた思想が生まれたのもこの時代である。別な見方をすれば現代の日

本の生き写しのような時代であり、現代の中国より日本にその原形が残っていて、時代の変遷を感じる。

中国の歴史小説の影響で、一九九八年に初めて中国世界遺産の張家界で開催された国際学会に参加して以降、北京、上海、武漢、杭州、香港、昆明、ウルムチなど多くの都市を訪問し、中国における発展を実感している。春秋戦国時代を扱った歴史小説ではよく出てくる都市に邯鄲（かんたん）がある。「邯鄲の夢」は日本でも有名である。趙の都であり、黄河の北に位置する河北省南部にあるそうだが、残念ながら私は訪れたことはない。「邯鄲の夢」は盧生（ろせい）という青年が、身を立てようと揚子江流域の大国・楚へ向かう途中、邯鄲の地で道士に枕を借りてひと眠りし、榮華を尽くした一生を送るが、目覚めてみると、まだ炊きかけのご飯もできあがっていない程の短い時間にすぎなかったという故事である。最近、還暦を過ぎて退職まで直近になると医学部に入学し医師になり、博士号を取得後に米国留学して、教授になって退職するまでのことが「一炊の夢」のように束の間の出来事であったように思える。私たちの年代は博士号を取得し、米国留学するのが夢であり目標であった。近年、医学部卒業後の初期研修が必修化されて、その後専門

医取得を目指す学生が増えていて、私のように留学し、基礎医学で研究を行う医師が減っている。自分の子供より若い学生に教授として接していると疎外感を感じ、時代の変遷にふと気がかされることがある。

東北大学出版会に関与するようになって時代の変遷をさらに感じるのが電子出版の出現である。一九九四年にシアトルで創業したアマゾンに代表される電子商取引（EC）は出版業界にも大きなインパクトを与えている。アマゾンが二〇〇五年に始めた会員制サービス「アマゾンプライム」の利用者数は二〇二一年に世界で二億人を突破し、私もユーザーの一人である。なるべく生協に本を注文して購入するようにしているが、アマゾンを利用するとその便利さに驚かされる。アマゾン端末で小説を購入して電子体で読むと、自宅から一歩もでることなく読むことができる。コロナ禍の影響で世界の小売業全体のEC化率は二〇二〇年に一八%となり、前年に比べ四・四%上昇し、二〇二一年の米国内の小売店舗閉鎖数は初めて一万店を突破したとの新聞記事を最近になって読んだことがある。医学書も電子化の潮流の中にあり、世界的な出版社のElsevierは医学領域全体に渡る電子医学書と試験問題集を含んだ電子書籍サービス“eReview”の

国内販売を開始している。時代の変遷とともに、種の起源を著した Charles Darwin の名言「最も強い種や賢い種ではなく、最も変化に敏感な種が生き残る」を実感している。四〇年近く、自分の興味のある研究や読書に浸り、退職を迎えて夢のような研究生活が霧のように消えていくように思える昨今である。

(やない かずひこ・東北大学教授、薬理学、昭和六一年東北大学院医学研究科博士課程修了)

近刊

善玉としてのヒスタミン

―花粉症から薬の作用を考える―

谷内一彦 著

B5判・四八頁・二二〇〇円(税込)

科研費による出版を承ります。

科学研究費助成事業の「研究成果公開促進費(学術図書)」を利用した出版をご検討の際は、ぜひ小会事務局までお声がけ下さい。「見積書」「発行部数積算書」等の作成を承ります。

(最近の実績例)

★平成三〇年度

西田文信著 『ナムイ語文法の記述言語学的研究』

高橋美能著 『多文化共生社会の構築と大学教育』

高橋秀太郎・森岡卓司編 『一九四〇年代の(東北)表象

―文学・文化運動・地方雑誌―』

★平成二九年度

尾園絢一著 『パーニニが言及するヴェーダ語形の研究

―重複語幹動詞を中心に―』

学術出版をお考えのみなさまへ

専門書、教科書、教養書、入門書、学会へのプロシーディングスなどの出版をご希望の方は、ぜひ小会宛にご連絡ください(連絡先は表紙面参照)。日本学術振興会科学研究費補助金や東北大学若手研究者出版助成の申請などを含め、ご相談させていただきます。

コロナ第5波が収束に向かってきたが、やはり予断を許さない。本出版会もそうした中で、『宙』第34号が発刊できた。栗山氏の『分子疫学入門』では、自閉症の原因に対する両親特に母親への辛い偏見が一九六〇年代まで久しくあつたことを指摘している。一日でも早い治療方法の確立を祈りたい。川内氏は、失われる歴史的資料の問題を指摘しているが、その種の危機感には共有できる。菅原氏の「津波と地質学」でも、古文書によって八六九年の津波がわかり、一九九〇年代に至って津波堆積物の科学的解明がなされたという。研究を真剣に追究していると、道を外れて思わざる学領域に入り込んでヒントを得ることがあるが、「学際」はその意味で価値がある。伊藤氏の「百科繚覧」と井本氏の「時代の流れ」にそれが窺われる。また、佐藤氏は、柳美里・内館牧子・多和田葉子さんなど、人との出会いによる自身の進展を語っている。そして、谷内氏は、現代が電子出版に入りこんでしまった時代であるとし、「最も変化に敏感な種が生き残る」と説いて、出版界に警告している。私たちはどう乗り切るか。(水原克敏)

宙 (おおぞら) に輝く北斗の七つの星に寄せて、

東北大学出版会が読書人に贈るエッセー 第三十四集

内容

- α星 自著を語る『分子疫学入門』精密医療の基礎知識／栗山進一(東北大学災害科学国際研究所教授)
- β星 いま、そこにある危機―喪われる「歴史」を守る―／川内淳史(東北大学災害科学国際研究所准教授)
- γ星 津波と地質学／菅原大助(東北大学災害科学国際研究所准教授)
- δ星 私の本棚／柳美里さんとの夏／佐藤弘夫(東北大学教授)
- ε星 帰郷―「若手研究者出版助成」から／「時代の流れ」／井本佳宏(東北大学大学院教育学研究科准教授)
- ζ星 書評・東北大学学際科学フロンティア研究所「百科繚覧」編集委員会編・東北大学出版会二〇一九年一月刊行『百科繚覧』若手研究者が挑む学際フロンティア Vol.1／伊藤房雄(東北大学大学院農学研究科教授)
- η星 東北大学出版会だより34／時代の変遷と電子出版／谷内一彦(東北大学大学院医学系研究科教授)